

《闘争する人格》と大学問題 (4)

——『職業としての学問』をいかに読むか——

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

アルトホフ体制下で進行する科学の専門化の趨勢は、現代科学に深刻な影響を及ぼし、専門人たちの精神的退嬰をも引きおこす。このことを掘りさげたヴェーバーは、専門内で分を尽くさざるをえない現代科学者の研究状況の問題性を剔抉し、それが呪力剥奪状況下の科学信仰（幻想）と結びつくことを解明する。そして、研究者が直面している不条理な状況を打破し、近代社会・近代科学・近代大学の諸問題に対峙するためには、ゲーテやグンドルフがしめしたような謙虚な「小さき者」にとどまるわけにはいかないことから、それとは別種の人格のありかたをヴェーバーは模索し、現代に生きる研究者の新たな態度決定を求める。

キーワード：マックス・ヴェーバー、『職業としての学問』、ドイツの大学問題、専門化

IV—2 専門化状況への対峙

IV—2—1 専門化の現段階の認識

近代科学と近代大学における専門化状況をめぐって

以上にみてきたドイツの大学事情は、近代における科学研究の変容、またドイツの大学の変貌と深い係わりを有している。アルトホフが牛耳ろうとしている大学は、中世以来の古い大学ではない。彼は、近代科学の興隆を把握し、ドイツの大学をその最先端の担い手として再定義し、各大学にさまざまな改革を求め、また有能な若手にポストを与え、さしあたりプロイセンの大学の、そしてさらにドイツ全土の大学の発展を促し、これをもって、プロイセン国家の、またドイツ帝国の強大化を図ろうとした。そしてその高度化を果たしたドイツの大学を、自身が一手に掌握し、操縦しようとしたのである。

そのため、アルトホフは、さまざまな領域における新進気鋭の若手研究者の登用に熱心であっ

た——そのなかにはヴェーバーも含まれている——。そして彼は、新しい手法による新しい研究を熱心に支援した。こうして、アルトホフ体制の下では、個別領域の専門研究が促進されることになる。それはプロイセンないしドイツの科学発展を促し、これはプロイセンないしドイツの繁栄を支えるのである。このように、アルトホフ体制とドイツにおける専門化の深化とは結びついており、専門化をめぐる問題とアルトホフ体制の問題とを切りはなして捉えようとするべきではない。

このように考えてみると、『職業としての学問』において、アルトホフ体制下の大学問題が取りあげられたあと、専門化の問題へと論が進められているのは、まったく当然のことと言わなくてはならない。そしてヴェーバーは、この専門化をめぐる問題状況にメスを入れ、これを多角的に考察している。以下にその論旨展開をみていくが、まず、従来の読解の失敗を引きおこしていた文法上の問題をみておく。

読解上の重要問題：「～なくてはならない」とはいかなる意味か

ヴェーバーが、sollen, müssen, zu tun haben、接続法第Ⅰ式の要求話法、あるいは他のさまざまな言い回しで「～すべきだ」「～するよう仕向けられている」「～なくてはならない」「～せざるをえない」「～してもらいたいものだ」と表現しているとき、つねに問題なのは、それが積極的・肯定的な含意なのか、それとも消極的・問題提起的な含意なのかである。整理するため、下記のように区分しよう。

含意Ⅰa（積極的・肯定的含意）：〈～なくてはならないから、かならずそうせよ〉という私（ヴェーバー）による（自他にたいする）主張・要求

含意Ⅰb（他者に限定した要求）：〈私（ヴェーバー）はこのように考え、行動しているが、他の者も、同様になすか、あるいはそれぞれ熟慮して別様に振るまうか、どちらかに決めてもらいたい〉という他者にたいする要求

含意Ⅱ（消極的・否定的含意）：〈～せざるをえないのが現状であるが、この現状には大きな問題があり、その打開策を考えなくてはならない〉という私（ヴェーバー）による問題状況の認識と課題の提示

これまでの自称研究者たち（あるいは自称翻訳者たち）は、sollen や müssen を目にすると、ほとんど機械的に含意Ⅰaに流れてきたと思われるが、文脈をしっかりと読み、段落の論理をみきわめると、『職業としての学問』中には——そしてヴェーバーの他の著作中でも——、含意Ⅱが多いことがわかる。含意Ⅱの判定にしくじると、当然にも、〈この現状には問題がある〉という文を、〈この現状はおおいにけっこうであり、この現状を追認すべきだ〉という正反対の意味に取りちがえることになるから、問題は深刻である。この判定を正しくなしうる者だけ

が、ドイツ語文章の読解・解釈・翻訳をなすことができる。そしてそういう能力をもつ者は驚くほど少数である。

その数少ないひとりが梶山力であった。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(以下『倫理と精神』と略記)の有名な一節「ピューリタンは職業人であろうと欲した——われわれはそうあらざるをえない」の「われわれはそうあらざるをえない (wir müssen es sein)」という箇所を、梶山は、「我々はかくあらざるをえない」と訳した (MWGI/18: 486, 梶山訳: 244 頁)。かつてピューリタンが欲した職業への献身と邁進が、いまや信仰を失った現代人にとっては、外的に強制された束縛でしかないという消極的な事態に変質しており、ヴェーバーがここを衝いていることを、梶山は見抜き、この müssen が含意Ⅱであることを正確に判定したのである。彼が 1938 年に正しく訳してくれたおかげで、その後われわれ日本の読者は、この箇所の解釈を誤ることがなかった⁽³⁸⁾。そしてこの梶山の正確な読解を共有したときにはじめて、——以下にしめすように——科学者たちが置かれている〈そうあらざるをえない〉状況に内在する深刻な問題性がみえてくる。

現代科学者の末人的状況にたいするヘルムホルツとシュモラーの批判

専門化が進行し、狭い区画内の職業人であらざるをえなくなっている現代科学者は、その与えられた(強制された)自分の持ち分のなかで尽力しているが、彼らは、往々にして、そうしたみずからの境遇そのものにたいする醒めた批判精神を喪失し、その境遇に安住することをよしとする自己弁明に陥る。これが末人化であり、科学信仰が蔓延する時代における呪力剥奪状況(後述)の端的な顕現形態である。

こうした科学者たちの末人的状況にかんする危機意識、またそれにたいする批判的見地は、ヴェーバーのみならず、この時代の一定数の——「多くの」ではないかもしれないが「ある程度の数の」——研究者が共有していた。『全集』版によると、この職業人であらざるをえない現代人が陥っている状況の描出は、直接にはシュモラーからの引用である⁽³⁹⁾ (MWGI/18: 488)。シュモラーは次のように書いている (Schmoller 1900: 225)。

数年前、ある練達の工学者 (ein großer Techniker) 自身が、あまりにも高慢ないまの時代を、真正の言句をもって、次のように特徴づけることを知っていた。「愛のない享楽人たち、精神のない専門人たち、かかる無の存在が、みずからを、歴史上人類未踏の高みに立っているものと思いこんでいる！」と。

ここで言及されている「ある練達の工学者」が誰なのかは詳らかでないが、ヘルムホルツか、ヘルムホルツの周辺にいた人物だと推察される。すくなくとも、ここに記されているような問題提起がヘルムホルツの立論と密接な関連を有していることは確実である。シュモラーがベル

リン大学に赴任した1882年以来、彼とヘルムホルツとは同僚であった。ヘルムホルツは、夙にこうした専門化状況を鋭く告発しており、それは、シュモラーの著書が仕上げられる数年前に、まとめて公刊されていた。

1896年に刊行(再刊)されたヘルムホルツの『講演・談話集 (*Vorträge und Reden*)』(第4版)のなかに、彼が1862年にハイデルベルク大学学長に就任したさいの記念講演が収録されている。この講演の全体が、専門化状況に浸っている科学者たちの退嬰状況にたいする峻厳な批判なのだが、そのなかから、とくにシュモラーの記述と関連が深い箇所を挙げておく(Helmholtz 1896: 167)。

個別科学のどれもが、ある種の精神的能力をとくに要求し、またその要求にしたがって、持続的になされる修練によって、かかる能力を強化するものである。しかし〔このようにしてなされる〕一面的な修養は、どれも危険を伴っている。こうした修養は、そこにおいて訓練されない種類の活動を不能にし、そのことによって、〔科学の〕全体をみる眼差しを制限してしまう。またそうした修養はとくに、ともすれば過大な自己評価へと駆りたてやすいものである。

ここに鋭く描出されているように、個別科学の狭い専門性は、科学者に、特殊な精神的能力(Geistesfähigkeiten)を要求し、そのための修練(Übung)を強要するのだが、この種の一面的な修養(Ausbildung)だけでは、科学ないし科学研究の全体を見渡す力はずかず、近代社会特有の困難を見据える眼も養うことができない。それにもかかわらず、真の教養をもたない専門人たちは、自己自身の過大評価と自己陶醉に陥るのである。

専門化は、有給教師が正教授へと変容していく十六世紀以来の現象である(別府昭郎 2016: 32頁)。そして、この現象が決定的な段階を迎えたのは十九世紀であった。既述のように、とりわけ哲学部の分裂が、自然科学と文化科学という二つの大領域から相互接触・相互作用を失わせ、古い大学が保持していた「諸学の全体性」への志向を見失わせ、諸学をひたすら専門化・細分化へと転落させていく結果を招いたのである(前掲書: 235頁)。その只中に生きていたヘルムホルツは、十九世紀末における専門化状況の深刻な問題性を見据え、とりわけ若い世代に向かって、近代科学の専門化の問題を打破するという大きな課題を訴えたのである。彼は、『講演・談話集』第4版の刊行に向けて、その死の間際まで、1862年の講演録をはじめとする旧稿に手を加えていたそうである⁽⁴⁰⁾。その執念は、まさに近代の近代性に対峙しつづけたヘルムホルツの人間性に発している。

シュモラーは、「ある練達の工学者」の言に接したのが「数年前」だと書いているので、ヘルムホルツが1894年に没する直前期に直接その警咳に接し、「愛のない享楽人たち」や「精神のない専門人たち」にかんする慨嘆を聞いたのではないかと思われる。また、シュモラーは『講

演・談話集』を読んだことであろう。

これらの論述を突きあわせると、ヘルムホルツの指摘を受けて、シュモラーが現代科学の陥った状況を批判し、それをヴェーバーが読んだ様子を窺うことができる。そして、ヘルムホルツとシュモラーの問題提起をヴェーバーが受けつぎ、それを、『倫理と精神』から『職業としての学問』にいたるまでの専門化批判へと醸成させていったと推定できる。

以上のように、十九世紀後半以降における専門化状況の深化と、それにたいするヘルムホルツの危機意識を踏まえると、『倫理と精神』における専門化批判・末人批判が、次にみる段落⑬を理解するうえで決定的に重要であることが理解できる。

ヴェーバーは、『倫理と精神』において、職業人であること（召命によって生きる《小さき者》であること）をわれわれは望まないのだが、外的強制によってむりやりこの職業人の枠に嵌めこまれて呻吟していることを深く剔った。彼がこの記述を最初に公にしたのは 1905 年のことであり、その後、1919 年から翌年にかけて、彼はこの論稿に入念な改訂を加えて印刷に付し、さらに校正時に加筆した。そして、献辞を調えたうえで最終的に仕上げたのが、すでに彼が死の床に就いていた 1920 年 6 月 7 日のことである⁽⁴¹⁾。この改訂時に、彼は、職業人であることは強制された事態であるというこの記述を、削除も変更もしなかった（MWGI/9: 422, MWGI/18: 486）。つまり、彼は、1920 年 6 月 14 日に亡くなるまで、1905 年のこの記述の見地を保持しつづけたのである。この見地は、当然『職業としての学問』の段落⑬においても貫かれている。〈ひたすら職業人であれ〉というピューリタンの——あるいはゲーテの——信条・主張にたいして、またその信条が現代においても通用するかのような俗流科学論にたいして、ヴェーバーは——ヘルムホルツやシュモラーとともに——明確に批判的なスタンスをとっているのである。

ビスマルクの〈専門化推進〉計略

ヘルムホルツとシュモラーとともに、ここでさらに参照すべきは、ビスマルクが専門研究者にたいしてとっていた（とされている）独特の態度である。専門化の動向は、各大学の組織や人事の問題と密接に絡みあい、それは当然にも各支邦の大学行政のありかたをも左右する。こうしたなかで、行政担当者がどのような政治的配慮をなしていたか、また大学行政が専門化状況とどのような政治的関連を有していたかを窺うことができるのが、以下に引用するビスマルクの発言である。これは木村毅が紹介している逸話だが、問題の多いテキストなので、前後の箇所も引用し、いくらかくわしく検討しよう（木村毅 1964: 169～170 頁）。

憲法調査のころの伊藤博文の最大の心配と煩悶は、新しい学問をして、大学を卒業してくる新知識に、どうして対抗してゆこうかということであった。伊藤自身の政治学の根底は、頼山陽の「日本政記」と「宋名臣言行録」ぐらいなものである。ところが、鳩山和夫だの、

斎藤修一郎だの、加藤高明だのは、大学で西洋人から正規な学問をたたきこまれ、その上さらに西洋で勉強をつんできたので、相手にとって手ごわい。

「そういう学者の取りあつかいは、どうしておられるのですか」

と尋ねたら、ビスマルクは愛用のシガーの煙を天井に向かって輪に吹き、それからカンラカンラと豪傑笑いをして言った。

「造作もないことだ。学者には、専門専門といってきかすと、だんだん自分の研究に深入りして、世間とははなれてしまった学問馬鹿ができる。俗事にかかわると手がよごれる、学者的良心がゆるさぬなどといって政治なんか軽蔑するに至る。だから些つとも問題はおこらない。たまに、これは先生の御専門だから御調査をねがいますと言って、閑事業の仕事でもあてがってやれば、それで得意になって満足しとる。だからね、寝言にも専門の尊重！これが学者操縦の秘訣でござるよ」

なにしろ伊藤は、ビスマルクに心酔のあまり、煙草ののみ方までパクーリ、パクーリと吹かすのをまねするので、随行の下僚から「シガレット・ビスマルク」という陰口をきかれていたぐらいだ。この学者操縦策も、もちろん「拳々服膺」し、帰朝すると、東京大学の組織を、教わった通りの専門尊重に切り替えた。

寺崎昌男は、この記述の信憑性について、木村に問いあわせており、木村は、伊藤に随行したひとりである「尾崎行雄の縁辺者」から直接聞いたと回答している⁽⁴²⁾。1882～1883年に渡欧した伊藤の随行員のなかで、尾崎と繋がりがある人物は、吉田正春だと思われる⁽⁴³⁾。吉田は1921年に没するが、木村は、1917年に早稲田大学を卒業し、翌年創業された春秋社に勤務しているので、その頃吉田との接触をもちえたのであろう。

伊藤とビスマルクとの会見にさいしては、青木周蔵が通訳を務めており、また伊東巳代治も同席していたと推察される。ここに記されているような立ちいった質疑の機会に吉田が同席できたとは考えにくいので、このビスマルク発言は、あとで、吉田らの随員に、伊藤が青木か伊東巳代治が話して聞かせたものであろう。それから四十年近くが経過してから、その内容を木村が吉田から聴きとっているのです、記録としての精度は落ちている。

それでも、木村がここに記しているのが、吉田の談話をかなり正確に再現していると推察される。というのは、ここで描かれている伊藤像が、吉田流に——すくなくとも悪意をもって——変形されていることをみてとることができるからである⁽⁴⁴⁾。伊藤の学問的基礎が浅薄なものであったという貶価がそれであり、またとりわけ「シガレット・ビスマルク」と陰口を利いていた「随行の下僚」は吉田自身であろう。

木村によるこの記述（吉田談話）から、伊藤がビスマルクのどのような部分からなにを学んだか、それが随行員の目にどう映っていたのかを読みとることができる。いうまでもなく、ビスマルクは多様な側面をもつ政治家だが、大学教授たちを扼する方策として、ほかならぬ「専

門の尊重」という計略をとっていたこと、また伊藤が彼から学びとろうとしたのもこの計略であったことは、記憶されてしかるべきであろう。

このように、各学問領域における専門化の流れをうまく利用して、さまざまな専門研究者を扼し、操るのが、ビスマルクとそれ以降の大学行政の計略であったとみることができる。したがって、専門化状況にたいするヴェーバーの闘争は、こうしたドイツの大学行政にたいする闘争という性格をも備えることになる。

多くの者が躓く段落⑬：批判すべき現状として描出されていることを彼自身の見解と誤認

ここでみる段落⑬は、〈ひたすら専門内で分を尽くせ〉という類の俗流科学論にたいする批判の端緒として、まずその現代科学・科学者・科学研究の現状を冷徹に描出した段落だが、これまでは、まったく逆に、こともあろうに、あたかもヴェーバー自身がその俗流科学論の見地に立っているかのように誤読されてきた。

ここが科学・科学者・科学研究の無様な為体（現状）を鋭く剔った論述であることは、原講演・再講演（語られたもの）においては、口調で看取できたはずである。ところが、それが速記者によって「書かれたもの」に変形されると、そうした《語りの鋭さ》《批判的口調》が再現されないため、この論述が、あたかもヴェーバー自身の主張であるかのような誤読が生じやすくなる。この「書かれたもの」を正確に読解するためには、《段落の論理》⁽⁴⁵⁾を読み解くことがもっとも重要である。

段落⑬の内容構成から、その《段落の論理》を、以下のようにまとめることができる（野崎敏郎 2016: 78～79 頁）。

1. 科学に向かう内的使命の考察：（そのためには科学にかんする状態を知る必要がある）
2. 現代における職業としての科学の営みにたいする「内的状態（die innere Lage）」を提示
3. その「事態（die Sache）」（＝現代の問題状況）の具体的な内容物を描出
 - 3a. 現代科学は、外的にも内的にも高度な専門化の段階にある
 - 3b. 科学における確実な業績の自覚は、専門化のなかにおいてのみ獲得できる
 - 3c. 領域越えの研究は、専門内ではなしがたい有益な問題設定を提供するにとどまる
 - 3d. あとあとまで残るという感情は、専門化によってのみ可能
 - 3e. 遮眼革を装着して研究に没入する能力が要求されている
 - 3f. 科学の「体験」を内面で味わうような情熱的熱中と科学に向かう使命との同一視
 - 3g. 人間自身にとって、情熱なしになしうることに価値はない

この段落の冒頭で、聴衆の意向を推察し、科学に向かう内的使命について考えてみようという素振りをいったんみせながら、ヴェーバーはすぐさま別の方向へと転ずる。つまり、語られ

ておらず、言外に暗示されているのみだが、〈科学に向かう内的使命を考察するためには、科学にかんする現在の状態を知る必要がある〉ことから、いったい現代において、職業としての科学の営みにたいして、いかなる「内的状態 (die innere Lage der modernen Wissenschaft und Wissenschaftler)」が立ちはだかっているのかをしめそうとする。つまり、われわれが問題視し、考察すべき事態 (die Sache) を、言いかえると立ちむかうべき困難を、言いかえると打倒すべき敵をしめそうとするのである。彼はこのことをはつきり断ったうえで、つぎに、その内的状態や末人的専門化状況の有様あるいは内的困難のありかを剔りだしている。

その末人状況の特徴づけが、上に列挙した七項目である。そして重要なのは、この 3a～3g の七項目のいずれもが、ヴェーバーの積極的主張ではないということである。彼は、現代科学が専門化の段階にある (3a) という現状を確認しているのであって、この現状が好ましいとか、専門化をさらに強化すべきだとか、そのような妄言を吐いているのではない。そうかといって、この専門化状況を解体せよと主張しているのでもない。充実した業績を挙げ (3b)、それがあととまで残るという充足感を獲得できる (3d) のが、いずれも専門化状況に対応しえた場合のみという現状を確認しているのだが、これにかんしても、はたしてそれでいいのかどうかという問いにたいして、彼はここで回答することを故意に回避している。一方、領域越えの研究には大きな限界があるが (3c)、ではそういう研究をするなと速断しているのかというと、そうでもない。よく知られているように、彼自身が領域越えの研究を旺盛に展開し、その成果は学術雑誌上に掲載されており、そのことは、ここで彼の講演を拝聴している学生たちもよく知っていることである。さらに、遮眼革を装着して研究に没入する能力をもつことが要求されているのだが (3e)、高度な専門化段階にある現代科学がそれを要求しているのであって、この要求が正当なものであるか否かという根源的な問いにたいして、彼はやはり回答を留保している。科学の「体験」を内面で味わう情熱的熱中が、科学に向かう使命と同一視されているのが現状だが (3f)、はたしてこの同一視が正当であるか否か、彼は回答を留保している。なるほど一般に、人間自身にとって、情熱なしになしうることに価値はないのだが (3g)、では、情熱をもって科学の仕事に励んでいるのだからそれでいいということになるのかというと、ここでも彼は回答していない。彼は、段落⑬の内部において、3a～3g の七項目のいずれにたいしても、あえて回答を提出しないという論法に出ているのである。

このように、段落⑬の論理はまったく単純明快であるが、同時に、まったく謎めいている。とりわけ、この段落がこうした留保の連続によって展開されていることに気づいていた日本人読者は、管見のかぎりではひとりもない。それどころか、この段落で、専門内に自己閉塞せよとヴェーバー自身が主張しているかのような荒唐無稽な誤読が長年にわたって横行してきた。そのため、この段落と、続く段落⑭以降の諸段落との関連づけがまったくみえなくなってしまうのであったのである。

ヴェーバーがこの講演録において専門化状況をどう扱っているのかは、この段落⑬だけを切

りはなしてみているだけでは、なかなかみえてこないかもしれない。そこで、段落③⑧と段落①⑨で語られている内容を、段落①③と突きあわせることによって、専門化状況にたいする彼のスタンスを確認してみよう。

専門化状況をどうみるか (その 1) : 段落①③と段落③⑧との照合

段落③⑧冒頭において、現代科学は「自己内省察と事実連関の認識とに従事して専門的に営まれる『職業』」であり、現代において科学がそうしたものであることは、「われわれの置かれている歴史的の局面に鑑みて免れえない所与の状況 (eine unentrinnbare Gegebenheit)」であると規定されている。科学の専門化は、強制された状況、克服すべき問題状況なのであって、ヴェーバーが望む状況ではない (野崎敏郎 2016: 段落③⑧要説 (1) 参照)。

このことは、段落①③における接続法第 I 式の用法に合致する。この段落の後半部で、遮眼革を装着して没入する能力をもたない者は、「それならやはり科学とは縁のないままでいるのがいい (der bleibe der Wissenschaft nur ja fern)」と言われ、また「汝はなにか別のことをするのがいい (tue etwas anderes)」と言われている (MWGI/17: 81)。この「とどまれ (bleibe)」と「せよ (tue)」は接続法第 I 式であり、要求語法である。そして接続法第 I 式を用いた要求語法は、他者にたいする要求ないし他人事としての要求であって、話者は、要求されている行為の主体とはならない。つまり、この箇所では、ヴェーバーが自分自身にたいして「とどまれ」だの「せよ」だのと要求しているのではない。また、自分を除いた他者にたいして要求するという身勝手な言動をなしているのでもない。彼は、接続法第 I 式を用いることによって、この要求そのものが、自分 (ヴェーバー) の意思とは係わりのない要求であること、つまり、当時の科学業界の動向として、「とどまるよう要求されている」「するよう要求されている」という外的状況をしめしているのである。

専門化状況をどうみるか (その 2) : 段落①③と段落①⑨との照合

段落①⑨において、呪力剥奪の問題状況が論じられている。呪力剥奪は、主知化と合理化とが増大した結果として、近代人が科学信仰へと転落したことに由来し、近代人の精神的荒廃 (= 末人化) を招くという状況を指ししめす概念である。この概念は、シュモラーの記した「精神のない専門人たち」が寄りあつまって構成する主知化世界の問題性にたいして適用される。

科学・科学技術による主知主義的合理化を含む主知化過程の内容物は、人間の劣化・腐朽化にはかならない。このことは、段落①③において描出された末人的科学研究者たち (ひたすら専門のなかに没頭する者たち) の姿に呼応している。段落①③の専門人論と段落①⑨の呪力剥奪論とは完全に整合的な関連づけを有している。ところが、従来、この呪力剥奪の意味が正確に読解されていなかった。それは、従来の似非訳が、この箇所を誤訳していたからである。段落①⑨の論旨を先取りするかたちになるが、ここでこの誤訳群を一瞥しておこう。

主知化と合理化との増大は、人間が置かれている生活条件にかんする全般的知識の増大を意味するのではなく、別のことを意味している。ではなにを意味してるのかについて、従来の訳は読解に失敗していた。まず尾高訳をみよう (尾高訳 1980: 33 頁)。

それを欲しさえすれば、どんなことでもつねに学び知ることができるということ、したがってそこにはなにか神秘的な、予測しえない力がはたらいている道理がないということ、むしろすべての事柄は原則上予測によって意のままになるということ、——このことを知っている、あるいは信じているというのが、主知化しまた合理化しているということの意味なのである。ところで、このことは魔法からの世界解放ということにほかならない。

ここでは引用を省略するが、間場寿一訳、中山元訳、三浦展訳も同様の迷妄に陥っている (間場訳: 51 頁, 中山訳: 191 頁, 三浦訳: 39 頁)。

一方、出口は次のように訳している (出口訳 1982: 380 頁)。

われわれは欲しさえすればいつでも学び知りうるということ、原理的にいうと、神秘的で、予測できない力がはたらいているということではなく、むしろわれわれが、原則としては、いっさいの事物を予測によって支配できるということ、こういうことをば知っているとか、ないしは信じているとかいうことが、主知主義化や合理化の意味なのである。ところでこれは魔力からの世界の解放ということなのである。

この「知っているとか」「信じているとか」に、接続法第Ⅰ式の含意が表現されているが、接続法第Ⅱ式は無視されている。

これにたいして、三木正之は以下のように訳出している (三木訳 1992: 17 頁)。

その気になれば人はいつでも知ることができるといった知識乃至は確信というわけであります。つまり原理的には、いかなる神秘的な、計算されえぬ力もそこには働いて来ない、そうした力は存在しないという確信でありまして、むしろあらゆる事物が、原理においては、計算によって支配されるという信念であります。これは世界を魔法から解き放つということの意味します。

さすがにこの練達の独文学者は、「知ることができる」の助動詞 können が接続法第Ⅱ式の könnte であることに気づき、「できるといった」という訳文に、その含意をわずかに滲ませているが、残念なことに表現が不十分であり、きちんと読解できているとは評しがたい。

この箇所の正確な訳は以下の通りである (野崎敏郎 2016: 145 頁)。文中とくに重要な動詞・

助動詞もしめす。

主知化と合理化との増大は、人間が置かれている生活条件にかんする全般的知識の増大を意味するのではありません。そうではなく、それはなにか別のことを意味しています。つまり、もしも欲する (wollte) とすれば、ただそれだけで、いつでもそれを学び知ることができるかのように (könnte) [短絡的に] 思いこむか信じこむことを、つまり、その内部で作用する神秘的で計測不能な力など原理的に存在しないなどと (es gebe) 思いこむか信じこむことを、つまり、それどころか——原理的に——計測によって万物を統御できるなどと (können) 思いこむか信じこむことを意味しているのです。じつにこのことが現世の呪力剥奪を意味しています。

この一連の文章のなかに、四つも連続して接続法が出現している。接続法の正確な解釈が、ドイツ語読解において決定的に重要であることは、誰でも知っているはずの常識事項であり、ここの論旨がヴェーバー自身の見解ではなく、他人の見解がしめされていることは、初心者でも気づくはずである。ところが、三木以外の自称訳者たちは、そもそもここに接続法第Ⅱ式が出現していることに気づいていない。また三木と出口以外、接続法第Ⅰ式が用いられていることにも気づいていない。初心者以前であり、あまりにもお粗末な失態である。なかでも尾高は、「学び知ることができるかのように (könnte)」の助動詞 könnte が強調されている——つまり〈彼らはできるかのような錯誤に陥っているが、できるわけがない〉という批判的含意が強調されている——のを故意に無視しており、きわめて悪質である。

尾高は 1936 年と 1980 年の二回、出口は 1954 年から 1982 年までの四回にわたって、訳出を試みているが、彼らは、何十年ものあいだ、時を隔てて訳文を見直しながら、この致命的な誤訳に気づくことはついになかった。

接続法第Ⅱ式は《仮構された非現実性》を、接続法第Ⅰ式は間接話法をしめす。拙訳において表現したように、知ろうと欲すれば知ることができるなどというのは、非現実的な妄念であり、現代人の末人的な思い上がりであって、実際には知ることなどできない。原理的に計測によって万物を統御できるなどというのも、科学信仰・専門家信仰に浸っている現代人の夢想である。接続法を巧みに配することによって、ヴェーバーは、現代人の迷妄をすどく剔り、また自分自身がこうした迷妄からきっぱりと絶縁していることを明示しているのである。

専門化にかんするヴェーバーの真意を読みとく方法

個別注解⑬4 のなかで指摘したように (野崎敏郎 2016: 95 頁)、この段落全体がヴェーバー自身の主張ではなく現状の批判的描出であることを、彼は、講演速記録に加筆するさいに、もつとくどいほど念押ししておくべきだったかもしれない。というのは、この段落を正確に読解し

た例がみあたらないからである。

筆者自身は、第一に、段落⑬の《段落の論理》を読みとることによって、この段落の内容がヴェーバーの主張でないことを確認し、第二に、とくに段落⑬冒頭部を手がかりとして、この講演録全体が、専門化というやっかいな「所与の状況」にたいする闘争を目論んでいることを確認した。そして第三に、シェリング、ゲーテ、ショーペンハウアー、ヘルムホルツ、ニーチェ、トルストイ、マリアンネ・ヴェーバーの論稿・記録・講演を読んで、当時の科学の問題状況にたいする論点を理解し、さらに第四に、ペロウのヴェーバー宛書簡を判読し、これをヴェーバーのペロウ宛書簡と突きあわせ、一往復半の書簡のやりとりを復元し、第五に、『倫理と精神』をはじめとするヴェーバーの他の著作と『職業としての学問』との突き合わせをおこなうことによって、ようやくこの段落の真意を理解できた(野崎敏郎 2016: 79～92 頁)。

したがって筆者は、《完全版》の「まえがき」において明示したように、いやしくも研究者を自認する者にたいして、(1) 段落⑬の《段落の論理》を読むこと、(2) この講演録全体において専門化状況がどのように取りあつかわれているのかを確認すること、(3) ヴェーバー以前における科学批判・専門化批判を読むこと、(4) ヴェーバーの他の著作や書簡中にしめされている専門化問題にかんする論述を読み、『職業としての学問』の論旨との突き合わせをおこなうこと、この四つの追検証作業(Nachkontrollieren)を遂行することを無条件に求める(野崎敏郎 2016: ii 頁)。そうでないと、こうした前提を知らないままただこの段落を読んだだけの者たちによって、今後も《専門内自己閉塞》的誤読が延々と再発するにちがいない。

この事態は、従来の読者が、この講演録の特異な性格を把握していなかったこととも係わっている。《完全版》の「研究編」において解明したように、この講演録は、故意にわかりづらく書かれ、十全な記述が意図的に回避された《中断された中間考察》である(野崎敏郎 2016: 394～395 頁)。前述のように、『職業としての学問』は、各段落ごとのまとまり、段落間の繋がり、暗黙の前提とされている状況、明示されていない引用元等々を把握し、行間を読みとっていったときにはじめて論旨が浮かびあがってくる著作であって、これは、こうした検証作業抜きにただ「虚心坦懐」(＝「無前提」)に読んでいけばその内容を把握できる著作ではない。この講演録は、いたるところに深い穴が掘られ、難解な言句が撒菱のようにびっしりとちりばめられ、聴く者・読む者にたいして、絶壁のように手がかりを与えない難攻不落の城塞のような様相を呈しており、これを、《学生向けの平易な入門書》であるかのように思いこんだままでは、その論旨を理解することはけっしてできないのである。

IV—2—2 専門化のなかの研究と研究者

段落⑭⑮：専門化のなかの研究過程の問題性と「人格」「体験行為」

段落⑬は、専門化状況の問題性を考察するための端緒である。そのことは、次の段落⑭を読

むと歴然としている。従来、段落⑬と段落⑭とがどのような関係にあるのかが見過ごされており、なにか別々の話題が脈絡なく並んでいるかのように思いこまれてきたが、それは、段落⑬が専門への自己閉塞を称揚していると誤読されていたことに起因する。この誤読にあつては、段落⑬で専門化状況を容認し称揚したはずのヴェーバーが、段落⑭⑮では、専門化状況の下における研究過程の諸問題を冷徹に吟味しているので、従来の読者は、ここで大きな混乱に陥らざるをえないのである。実際には、段落⑬⑭⑮にあつては、いずれも専門化状況の問題性が掘りさげられており、これらは緊密につながられた一連の論述である。

段落⑭においては、専門化状況の只中にある科学者の研究過程が、どのような問題を孕んでいるのかが考察されている。段落⑬の末尾で触れられている「情熱」の限りを尽くしたところで、なにか価値のある成果が得られるか否かは定かでない。当時普及しつつあった集計機械等の新しい手段を利用していてもそうである。着想と精密な研究過程とが合わさって成果が得られるはずだが、優れた研究者であっても着想が得られないということもありうる。それは僥倖 (Hazard) に依存しているのだが、研究活動そのものの官僚制化が深化しているため、有効な着想がないまま、ただ素材を操作しただけの無価値な「成果」を量産するテクノクラートの末人研究者が跋扈しつつある (野崎敏郎 2016: 106 ~ 107 頁)。

このように、科学の営みの成果が僥倖に委ねられているという状況下で、別の問題が生じていることが、段落⑮においてしめされる。価値ある着想も厳密な研究方法ももちあわせない輩が、神智学・神秘主義を拠りどころとしながら、自己自身の神秘化を図っているのである (野崎敏郎 2016: 123 頁)。ここで念頭に置かれているのはヴェーバーとゲオルゲだと思われる。上山安敏は、ヴェーバー思想におけるカリスマたる師への帰依の問題を論じ、また、専門主義・相対主義を克服しようとする文化志向が体験と直観に依拠した同志的結合を希求し、それがゲオルゲと結びついていると指摘した (上山安敏 1986/94: 97 ~ 120 頁, 同 1984/2001: 30 ~ 39 頁)。

段落⑭⑮には、現代科学・科学研究にまわりついている重要な諸問題が提示されているが、それらは拙著において詳述したので、さしあたり省く。ここでは、この二つの段落が、「専門化」にかかわる研究活動の危機と「人格」「体験行為」にかかわる研究者の人格の危機を剔っていることを確認するとともに、次の段落の検討に取りかかる。

ヴェーバーは、段落⑬⑭⑮で描出されている末人状況にたいして当然批判的である。彼は、これに對置して、科学研究に従事する研究者の「人格」がどうあるべきかを掘りさげようとする。これが段落⑯以降の論述の狙いである。

段落⑯：ゲーテとグンドルフからの留保的引用

段落⑯は、この「人格」の問題とかわって、ゲーテとグンドルフの見解を紹介し、それを留保つきで (ひとまず) 肯定しながら、じつはそれだけではまったく不十分であることを、続

く段落⑰以降においてしめすための《前振り》《橋渡し》的位置づけの段落だが、これまで、この段落⑯が、なにかヴェーバーの学問論のエッセンスであるかのように曲解されてきた。それは、尾高邦雄と出口勇蔵による捏造によるところが大きい。そこで、彼らによる訳文操作をみよう。

段落⑯後半部の尾高による歪曲

尾高邦雄は、『職業としての学問』の初訳（1936年）において、当該箇所を次のように訳していた（尾高訳 1936: 30 頁）。

自己を減して専心すべき仕事を逆に何か自分の名を売るための手段のやうに考へ、自分がどんな人間であるかを「体験」で示してやらうと思つてゐるやうな人、つまり、どうだ俺はたゞの「専門家」ぢやないだらうとか、どうだ俺の言つたやうなことはまだ誰も言はないだらうとか、さういふことばかり考へてゐる人、かうした人々は学問の上では間違なく何ら「個性」ある人々ではない。かうした人々の出現は今日広くみられる現象であるが、然しその結果は彼らが徒に自己の名を落すのみであつて、何ら大局には関係しないのである。むしろ反対に、自己を減して己の課題にのみ専心する人々こそ、却つてその仕事の価値の増大と共に自然その名を高める結果となるであらう。この点は芸術家の場合も同様である。

じつに奇怪な「訳文」である。尾高は、この件をことのほか氣に入つたらしく、1966年に、雑誌企画「世界の名言」においてこの箇所を取りあげ、しかも1936年の訳文のままではなく、わざわざ訳しなおしている⁽⁴⁶⁾。

自己を減して専念すべき仕事を、逆に自分の名を売るための舞台であるかのように考え、「体験」によって自分を見せびらかしたい人、つまり、どうしたら自分がたんなる専門家でないことを示せるかとか、どうしたら形式の点であるいは内容の点でまだだれもいったためしのないことを自分がいえるかとか、そういったことばかり考えている人——こうした人は、学問の領域ではまちがいなくなんら「個性」のある人ではない。こうした人びとの出現は、こんにち広く見られる現象であるが、その結果はかれらがいたずらに自己の名を落すのみであつて、なんら大局には影響しないのである。それにひきかえ、自己を減して自分の課題にのみ専念する人こそ、かえつてその仕事の価値の増大とともに、おのずからその名を高める結果となるであらう。芸術家のばあいもまったく同様である。

尾高は、1980年に改訳したとき、さらに改変して次のような訳文を与えた（尾高訳 1980: 28 頁）。

自己を減して専心すべき仕事を、逆にになにか自分の名を売るための手段のように考え、自分がどんな人間であるかを「体験」で示してやろうと思っているような人、つまり、どうだ俺はただの「専門家」じゃないだろうとか、どうだ俺のいったことはまだだれもいわないだろうとか、そういうことばかり考えている人、こうした人々は、学問の世界では間違いなくなんら「個性」のある人ではない。こうした人々の出現はこんにち広くみられる現象であるが、しかしその結果は、かれらがいたずらに自己の名を落とすのみであって、なんら大局には関係しないのである。むしろ反対に、自己を減しておのれの課題に専心する人々こそ、かえってその仕事の価値の増大とともにその名を高める結果となるであろう。この点は、芸術家のばあいも同様である。

ここにしめした 1936 年版、1966 年版、1980 年版のいずれも翻訳ではない。尾高による捏造作文である。1980 年版を中心として、その問題点をみていこう。

まず、この尾高訳各版において二回出現する「自己を減して」に該当する語が原文にはない。「自分の名を売るための手段」に該当する語句も原文にはない。逆に、原文にある「作法あるいは中身において」が 1936 年版には脱落している。1966 年版では「形式の点であるいは内容の点で」と訳されたが、奇妙なことに、1980 年版になるとまた脱落してしまっている。

さらに、原文には、「かれらがいたずらに自己の名を落とす」に該当する言句がない。「なんら大局には関係しない」に該当する言句も原文にはない。また「大局に関係しない」とはどんな事態のことなのかかわからず、意味不明である。

こうした現象が「いたるところで小心翼翼として幅を利かせている」という表現が脱落しており、「自分が事えていると偽っている」という重要な箇所もそっくり脱落している。一方、「その仕事の価値の増大とともに」に該当する言句が原文にはない。その人々が「その名を高める」という表現も原文にはない。

原文では、「本分の高みと真価へと、彼を高めてくれる」はずだが、現実にはそれが果たされてい^{ない}という含意が接統法第Ⅱ式によって明確に表現されているのに、尾高訳ではこの含意が脱落しており、あたかも本分に没入するだけでいいかのように、文意が単純化され、歪曲されている。これは、訳文のようにみせているが、じつは尾高の持論を書いたものにすぎず、尾高は、それをヴェーバーが書いたかのように偽装しているのである。

段落⑩後半部の出口による歪曲

出口は、1954 年から 1982 年まで、この講演録を四回訳出している。そしてそのつど、尾高訳からの改変を図ろうとして成功しなかった。彼による最初の訳を引用しよう（出口訳 1954: 139 頁）。

専門学科の大御所になったつもりで、己れをむなしゅうして専心すべき仕事につかえることをせずに、専門学科を召使あつかいして社会の舞台にたちあらわれ、「体験」に物いわせて自分を誇示したいと思い、自分がただの「専門家」じゃないということをどうして示したらよからうとか、いいあらわし方なり、内容なりからいって、まだ誰もいわなかったことをいうにはどすればよからうとか、そんなことばかり気にかけているような人——こういう人は学問の上では、「人物」などでは毛頭ない。こうした人々はこんにち多くなっているが、その影響はどこでもいたって小さいものであり、かつ、そうした人々は、そんなことをして、自分の名をおとすだけのことである。これに反して、己れをむなしゅうして自己の課題に心をうちこむ人々こそ、その仕事の尊さをたかめ、その名もおのずから挙がるというものである。芸術家の場合も、事柄はすこしもかわらない。

出口による最後の訳は以下の通りである（出口訳 1982: 377 頁）。

おのれを空しゅうして仕事に専念せずして、専門学科の大御所になったつもりで専門の学界にたちあらわれ、「体験」にもいわせて自分を誇示したいと思い、自分がただの「専門家」じゃないということをどうして示したらよからうとか、いい現わし方なり、内容なりからいって、まだ誰もいわなかったことをいうにはどすればよからうとか、そんなことばかり気にかけているような人——こういう人は、学問の上では、「人物」などでは毛頭ないのだ。——こうした現象はこんにち多くなっているが、その影響はどこでも至って小さいものであり、かつ、そうした人々は、そんなことをして、自分の名を落とすだけのことである。これに反して、おのれを空しゅうして自分の課題に心をうち込むひとびとこそ、その仕事の尊さをたかめ、その名もおのずから挙がるというものである。芸術家のばあいも事情はすこしもかわらない。

この訳文もまた恣意的な歪曲の産物であるが、二回出現する「おのれを空しゅうして」などというありもしない言句の捏造、「自分の名を落とす」という誤訳など、尾高訳を踏襲しており、「自分が事えていると偽っている」の脱落、接続法第Ⅱ式の無視もまた尾高に倣っている。また、1965年版以降、「舞台」を消してしまうことによって、原文からさらに遠ざかっている。こうした現象の「影響はどこでも至って小さい」という言句が原文にない。

なお、1965年版以降、「こうした人々はこんにち多くなっている」という誤訳が、「こうした現象はこんにち多くなっている」に改められている。

折原浩によるヴェーバー貶価

「自己を減しておのれの課題に専心する人こそ、かえってその仕事の価値の増大とともにそ

の名を高める結果となるであろう」(尾高訳) などという文は存在しない。出口訳では「その仕事の尊さを高め、その名もおのずから挙がる」となっており、ここでも尾高訳に引きずられて誤訳が生じている。原文では、「名を高める」ではなく、「本分 (Sache)」が有している「高み (Höhe)」と「真価 (Würde)」⁽⁴⁷⁾へと高めると言われているのである。

折原浩は、尾高・出口のこの捏造に惑わされ、この Würde を「名声」と捉え、ヴェーバーを貶価する結果を招いている(折原浩 1981: 294 頁, 野崎敏郎 2016: 301 頁)。

かれ [= ヴェーバー] はそこ [= 『職業としての学問』] で、「自己を減しておのれの課題に専心する人こそ、かえってその仕事の価値の増大とともにその名を高める結果となる」と述べて、「成果」―「名声」への「転移」の可能性を開いてしまっている。

これは重大な問題なので、個別注解⑩7において、6 種類の邦訳・6 種類の英訳を点検したうえで詳解し、この捏造の息の根を止めた(野崎敏郎 2016: 136 ~ 138 頁)。

なお、この注解では取りあげなかったが、岡部拓也のウェブ上の仮訳においては、「仕事への心からの献身、そしてそれだけが、科学者を彼が仕える課題の高みと尊厳へと引き上げるはずです」と訳されている(岡部訳 2002)。他の訳と同様、vorgibt (偽る) が脱落しており、また emporhölbe (高めてくれるでしょうに) の接続法第 II 式の含意表現も不十分だが、尾高・出口・折原よりもはるかにましである。岡部は物理学者であり、ヴェーバーにかんしては門外漢だが、きちんと訳そうとすれば、素人でもこの水準の訳が可能なのである。いままでヴェーバー研究に携わってきた(と称する)人々は、なぜ尾高・出口の捏造を正すことができなかったのだろうか。

段落⑩後半部の《隠された引用》

みてきたように、段落⑩後半部の誤読・歪曲は、ヴェーバーの基本思想を韜晦させ、それを正反対にねじまげるといふ深刻な問題を引きおこしてきた。当該箇所は、実際には、ゲーテとグンドルフの見解を引き合いに出し、そこにヴェーバーが留保つきのコメントを付しただけの部分であって、この講演録のエッセンスをしめした箇所ではない。この段落の論旨は、ここで引用されているゲーテとグンドルフの論述をヴェーバーのそれと対比してみると明瞭に理解できる。

まずゲーテの立論をみよう。ゲーテは、批評家・評論家にたいして次のように苦言を呈している (GWM19: 407)。

偉大な人格を感じとって尊敬するためには、同様にその人自身もまたひとかどの者でなくては無理だ。エウリピデスにかんして崇高さを否認した者どもは、すべて哀れな難癖屋であ

り、こうした高揚にたいする能力がないのだ。別の言いかたをすると、この連中は、思いあがって、貧弱な世間の目の前で、実際の自分よりも多くのものを引きだしてみせかけようとし、また事実そうみせかけることのできた恥知らずな大ぼら吹きどもなのだ。

こうしたゲーテの主張を踏まえて、グンドルフも、今日跋扈している俗物どもを次のように指弾している (Gundolf 1908: 111)。

ひとつの才能や、ひとつの特別な弁才や、ひとつの特別な欲望をわがものとしているという理由だけで、自分を自己目的化するのに十分だと思っているような者、こうした人物は、彼の不明瞭な自我をみせびらかし、そして今日とかく珍奇なものにたいして献呈されがちな安っぽい名声を掻きあつめているのである。

グンドルフは、そうした自己顕示に汲々とする卑小な者たちと対比して、人格者のありかたを模索する。「偶然的な個々の局限された形式は、つまりちっぽけな人間が生まれつき抱えこんでいるひとつかみの衝動・願望・着想・能力といったものは、十分活かされてしかるべきであり、それは最終目的であろうとし、それにたいする畏敬の念を要求する」。ここで人格者たらしとする者は、「清浄に黙して状況の抑圧の下に沈潜する時代の犠牲者であるか、あるいは全面的に刷新された生活へと彼を導いてくれる師匠 (Meister) を探すか」のいずれかの途をとることになる。そしてグンドルフは、その望ましい姿を、使徒になぞらえつつ、次のように描出する (ebd.: 111f.)。

自分が師匠ではないと思う者は、[かかる師匠への] 奉仕者か門弟になることを学ぶ——それはせかせかした虚栄心よりはましである——。[中略] もしも、彼らがちっぽけな存在であるからといって彼らを嘲笑する者がいるのなら、笑われた彼らは、最高の象徴を思いだせばいい。キリストの門弟 (使徒) のなかには天才はひとりもいなかったし、ユダのほかに、今日の理解におけるひとりの人格者もいなかった。しかし彼ら——貧しき漁民たち——は忠実で、奉仕と信仰と愛に満ちていたから、彼らは、世界において、ユダヤ人や異教徒のなかのはるかに才能あるソフィストたちの誰よりも、自分自身においてずっと充実した実りの多い者たちなのであり、彼らの血は、今日なお偉大な愛の泉のなかを流れているのである。

ここからわかるように、ひたすら本分に事えよという命題は、あくまでもゲーテの主張であってヴェーバーの主張ではない。また、ゲーテに示唆されて、グンドルフは、自己顕示に陥ることなく、「師匠」から謙虚に学ぶ「小さき者」であれと主張している。これにたいして、ヴェーバーは、ゲーテともグンドルフとも異なり、本分に事え、師に学ぶだけではまったく不十分だ

と考へている。

段落⑩後半部の正確な解釈

ヴェーバーは、とりわけグンドルフの記述を念頭に置いて、当該箇所を語っている。この箇所の正確な訳と解釈は《完全版》にしめしている(野崎敏郎 2016: 138 ~ 139 頁)。その訳文を再掲する。

科学の領域において、〔本来ならきちんと〕専念するはずの仕事の興行主としてノコノコと舞台に登場し、「体験行為」によって自己を正当化しようとし、自分がたんなる「専門家」とはちがう人間であることをいかに証明しているかを問いかけ、作法あるいは中身において、まだ誰も自分のようには語らなかったことを語るということを、自分がいかにやってのけているかを問いかける人物は、もちろんなら「人格者」ではありません。——こうした現象は今日大量に生じ、それはいたるところで小心翼翼として幅を利かせており、〔もしも本分たる〕課題に、そして課題にのみ、心底没入するならば、自分が事えていると偽っている本分の高みと真価へと、彼を高めてくれるでしょうに、それを怠っておいてかかる問いをなす者を〔=彼みずからを〕この現象は貶めています。芸術家にあっても例外ではありません——。

「科学の領域において」から「なんら『人格者』ではありません」までが、グンドルフの記述の(ヴェーバーによる)パラフレーズである。そして、二つのダッシュで囲まれた部分(「こうした現象は」から「例外ではありません」までの部分)が、グンドルフの立論にたいするヴェーバーのコメントである。しかし、グンドルフからのこの留保付きの引用は、引用元がまったく記されていないため、そのかぎりにおいては、なにかヴェーバー自身の主張であるかのようにもみえる。

講演当日の聴衆のなかには、パーシー・ゴートハイン⁽⁴⁸⁾らのゲオルゲ支持者が含まれており、彼らは、当然ゲオルゲ派の機関誌『芸術草紙 (*Blätter für die Kunst*)』を熟読しているから、当該箇所が、この雑誌に寄せられたグンドルフの評論からの引用であることを察知し、「ああ、これはグンドルフのあの評論からの引用だな」と気づいたことであろう。また、聴いていて引用元がなんであるのかを特定できなかった人々も、ここで講演者がなにを引用しているのかはわからないが、とにかく引用的文脈であることは口調から嗅ぎつけることができたのであろう。しかし、「書かれたもの」になると、そうした《臭い》が消えてしまうので、読者は気づきにくい。印刷されたものを読んだ当時のドイツ人研究者やヴェーバーの友人たちは、はたしてこれがグンドルフからの引用であること(あるいはそもそもこれが引用的文脈であること)に気づいただろうか。ゲオルゲやグンドルフとの交友のあったマリアンネ・ヴェーバーやマリー・ルイーゼ・ゴートハインは気づいたと思うが。

試みに、元の（語られたものとしての）^{げん}原講演・再講演を再現してみると、この箇所は次のような語り口だったと推測される。

…もちろんなら「人格者」ではないということになります。たしかにここでも言われているように、今日こうした現象が大量に生じており、それは学者の業界のいたるところで小心翼翼として幅を利かせていて、こういう困った連中が、もしも課題に、そして課題にのみ、心底没入してくれるならば、彼らが事えているかのように偽っている本分の高みと真価へと、自分自身を高めてくれることでしょうが、実際にはそれを怠っているながらこんな問いかけをやらかしているのですから、そういう者を、この現象は貶めています。芸術家にもそんな人がいますね。しかし、だからといって、われわれの時代が置かれている特殊な文明史的状況にあっては、はたしてそうした課題への没入・専心をすれば、それだけで十分やっていくことができ、またこの時代の諸問題に対処できるということになるのでしょうか。ここが問題ですね。さあ、つぎに（段落⑰以降で）この点についてじっくり考えてみましょう。

この段落⑰への橋渡しの言⁽⁴⁹⁾が、速記録では省かれたのではなからうか。

筆者自身は、この段落⑰について、まずゲーテとエッカーマンの対話記録やジンメルの本などを読んで、この段落前半部の意味するところを把握できたが、後半部については、かなりの期間謎のままであった。その後、ここに一部を引用したグンドルフの評論を読み、それがこの段落後半部の典拠であることに気づき、これによって始めて、この段落後半部が《留保つきの引用》であることを把握できた。

公刊にさいして、ヴェーバーは、この箇所について、他人の見解を引用していることを明示し、かつ自分はこれにたいして留保すると明言すべきではなかったか。あるいは、彼は講演時にここが引用的文脈であることを明言したが、速記録では省かれ、彼もそれをそのまま放っておいたのだろうか。

出口勇蔵の迷妄

以上にみてきたような段落⑰をめぐる入りくんだ事情から、この段落が正確に読解されたケースは——管見のかぎりでは——ひとつも見当たらない。それどころか、ほとんどつねにこの段落の文章に激しい改竄が加えられ、論旨が正反対にねじまげられ、その結果、読者は大きな迷妄・混乱に陥ってきた。その迷妄ぶりを典型的にしめているのが、出口勇蔵の「解題」である。同様のものが出口訳各版に付せられており、ここでは最後の版のものを引用する（出口訳 1982: 441）。

青年は学問と実践との統一という重大な課題にこたえようとするあまり、ありあわせの政

治的立場に共鳴して、必ずしも現実的でない思考にとりつかれ、実践へと情熱をかたむけ勝ちであるけれども、そこに必ずしも正しい行くてがあるわけではあるまい。身近にある問題を誠実に知りかつ解いて、時代の要求にこたえるべく地道な努力をおしまぬことから、現代に生きる道は開かれるであろう。

これは、直接には、この講演録末尾の内容に即したつもりの解説だが、ヴェーバーの主張とは正反対である。この解説文は、1965 年版以降の出口訳に付せられており、この時期の日本の情勢をみた出口自身の見解をしめしたものであって、彼は、あたかもヴェーバーも自分と同じ見地に立っているかのように偽装している。

出口はまた、大学問題との係わりで、「辛抱よく誠実に研究をすすめてゆけば、道はおのずと開けてゆくであろう」とヴェーバーが説いたかのように強弁している（前掲箇所）。この講演録が、日本において、どのような時代的文脈において読まれ、またどのような役割を割りふられていたのが赤裸々にしめされている。出口がヴェーバーに重ねてみせた主張は、一言で特徴づけると《俗流学者处世術》の勧めであり、この時期の日本の大学教員たちのなかに、こうした俗流学者处世術に浸っている者がすくなくいることをしめしている。

ヴェーバーの見地は、出口とはまったく異なっている。出口のような俗流学者处世術では、現代を生きぬくことも現代の課題を担うこともできない。誠実に研究をすすめていても、それは科学や大学をめぐる諸問題の解決には結びつかない。尾高のひねりだした「自己を減しておのれの課題に専心する人々」も、出口のひねりだした「おのれを空しゅうして自分の課題に心をうち込むひとびと」も、専門化状況のなかで保身に汲々としている末人たちであって、それはヴェーバーの求める「人格者」ではない。こうした現代の科学研究者たちの為体は、トルストイによって鋭く告発されており、トルストイの問題意識は、ヴェーバーや『職業としての学問』の聴衆たちにも共有されていた（後述）。研究者が直面している不条理な状況——それはこの講演録のなかで克明に描出されている——を打破し、近代社会・近代科学・近代大学の諸問題に対峙するためには、ゲーテやグンドルフがしめしたような謙虚な「小さき者」にとどまるわけにはいかない。それとは別種の人格のありかたが求められる。ヴェーバーは、こうして、現代に生きる研究者の新たな態度決定を求めるのである。

現代に生きる道は、「身近な問題」ではなく、むしろ自分とは異なった立場にいる者たちの苦境にしっかり目を向け、現代科学と現代科学者が置かれている不条理な状況を——突きはなした眼をもって——認識し、それを打破・打開するための闘争、また科学界・大学界における人間性復権のための闘争へと踏みだすことであり、ヴェーバーは、このことを、現代における「人格」の課題として、疑問の余地なく明示している。——この点については、本稿の後段においてくわしく考察する予定である。

段落⑰以降の論旨展開の基調

純粹に本分に事えている者が眞の科学者だというのはゲーテ垂流の俗論であって、ヴェーバーはこの俗論を論破しようとする。それが段落⑰以降の周到な議論である。段落⑯を、この俗論を確認し、それを破砕するための《前振り》だと捉えないと、段落⑰以降を読むことができない。

前もって一瞥しておく、段落⑰以降の主旨は、純粹に本分に事えているだけでは、不条理な近代に立ちむかい、そのなかで生きぬくことはけっしてできないという厳然たる状況を聴衆（読者）に突きつけることである。段落⑯において、なるほど自分の本分に事えることはいつの時代にも必要で、グンドルフが警鐘を鳴らしたように、今日それを疎かにする風潮があるのは由々しきことだが、ではそれだけでいいのだろうかという問いかけがなされた。この問いを受けて、段落⑰以降では、自分の本分に事えているつもりでも、それだけでは末人への転落が避けられないのであり、これが近代という時代に特有の困難であることが説かれるのである。ヴェーバーは、近代という時代における科学研究ないし学問研究の危機を冷徹に捉え、ゲーテやグンドルフの見地では、この危機にたいして有効に対峙しえないことから、この二人とは明確に一線を画する。そしてヴェーバーは、研究者の新たな態度決定を求める。これが彼の人格論の核心をなす。そこには、専門化状況のなかに端的にしめされている近代科学の諸問題を、その根本において把握し、現代に生きている研究者ないし大学人の運命を見据え、近代科学と近代大学との隘路を打破する途を探りあてようとする彼の強固な意志が顕現している。

そこでつぎに、段落⑰以降の論述中に横たわっている《難所》を点検し、段落⑰以降の論旨を、段落⑯までの論旨と照合し、この講演がきわめて精緻な論理構造を構築していることを説明しよう。

(第Ⅳ章未完)

〔注〕

- (38) ところが奇怪なことに、中山元は、この箇所を「職業人でなければならないのである」と改変してしまった（中山訳『倫理と精神』：492頁）。梶山がすでに正訳し、それに則って、現在にいたるまで正確に読解されていたのに、中山は、ここをわざわざ改悪し、無用な混迷を招いたのである。よもや中山の珍訳に惑わされる研究者はいないと思うが、中山訳を読んでいる素人読者が惑わされかねないので、ここでも注意を促しておく。
- (39) この出典を突きとめたのはハンス＝クリストフ・クラウスである（MWGI/18: 488）。
- (40) 『講演・談話集』第4版に寄せたアンナ・フォン・ヘルムホルツの序文による（Helmholtz 1896: XIV）。
- (41) この経緯はすでに解明した（野崎敏郎 2016: 372～373頁）。
- (42) 寺崎は、著作のなかでこの木村の証言を書きとめている（寺崎昌男 2000: 409頁）。この著作のもととなった寺崎の論稿「『講座制』の歴史的研究序説——日本の場合（2）——」の初出は1974年で、そこにも同様の記述がある（広島大学『大学論集』2, 1974年, 87頁）。寺崎は、当時存命中だった木村に直接問いあわせたものと思われる。

- (43) 吉田正春の数奇な人生行路については省略するが、彼は、もともと民権運動の担い手のひとりであり、尾崎と同様、1887 年の保安条例によって東京からの退去を命ぜられ、後に第一回総選挙に立候補して落選している。
- (44) 吉田と伊藤とのあいだには大きな確執がある。しかもその確執は、まさに伊藤一行の渡欧時に生じており、そこにおいて両者の政治対立・思想対立が顕在化したのである。吉田が後年語った別の回顧記録には、伊藤にたいする激しい敵意がそここに記されている。そしてここで紹介している木村への談話にも、その論調をはっきりとみてとることができる。
- こうした吉田にかかわる諸問題については、いずれあらためて詳述するつもりである。
- (45) ヴェーバーの著作における《段落の論理》がどのようなものであるのかは、すでに明らかにした(野崎敏郎 2016: 379 頁)。また全 40 段落の論理構成もすでに明示した(前掲書: 315 ~ 319 頁)。
- (46) 『中央公論』第 81 巻第 2 号, 1966 年 2 月, 416 頁。
- (47) 尾高・出口は、この Würde を「名声・体面・沽券」であるかのように不当に矮小化している。これを「尊厳」「品位」と訳したのでは意味が十分伝わらないと考え、拙訳では「真価」と訳した。
- (48) 聴衆のなかにパーシー・ゴートハインがいたことは、彼とともに講演を聴きに來ていた友人カール・レーヴィットが証言している (Löwith 1986/2007: 18)。
- (49) 講演を聴いている者は、当然段落分けをみることはできないが、口調・間合いによってそれを看取できたことであろう。

〔文献〕

- Gundolf, Fr. 1908: Gefolgschaft und Jüngertum. *Blätter für die Kunst*, 8. Folge. 上村清延訳 1943「随順と門弟」ゲオルゲ『芸術について』三笠書房
- GWM19: Goethe, J. W., *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens; Münchner Ausgabe, Bd. 19. Eckermann, J. P., Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*. München: C. Hanser, 1986. 山下肇訳 2012『ゲーテとの対話 (上中下)』岩波書店
- Helmholtz, H. v. 1896a: *Gesammelte Schriften, Bd. 5, Vorträge und Reden, Bd. 1.*, 4. Aufl. Braunschweig: F. Vieweg. 三好助三郎訳 1961「自然科学の科学全体に対する関係について」『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇 34』河出書房新社
- Löwith, K. 1986/2007: *Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933; Ein Bericht*, Neuausgabe. Stuttgart: J. B. Metzler. 秋間実訳 1990『ナチズムと私の生活——仙台からの告発——』法政大学出版局
- MWGI/9: Max Weber *Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 9. Asketischer Protestantismus und Kapitalismus; Schriften und Reden, 1904-1911*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2014. 梶山力訳, 安藤英治編 1994『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未來社
- MWGI/17: Max Weber *Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 17. Wissenschaft als Beruf 1917/1919 - Politik als Beruf 1919*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1992
- MWGI/18: Max Weber *Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 18. Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus. Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus. Schriften 1904-1920*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2016. 梶山力訳 1938『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』有斐閣, 中山元訳 2010『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』日経 BP 社
- Schmoller, G. 1900: *Grundriß der allgemeinen Volkswirtschaftslehre, erster, größerer Teil*. Leipzig: Duncker & Humblot. 山田伊三郎訳 1914『国民経済学原論第 2 冊 要素』富山房
- 間場訳: 間場寿一訳 1968『職業としての学問 (対訳)』三修社
- 上山安敏 1984/2001『神話と科学——ヨーロッパ知識社会 世紀末～20 世紀——』岩波書店

上山安敏 1986/94『世紀末ドイツの若者』講談社

岡部訳: 岡部拓也訳 2002『職業としての科学』(<http://jaguar.eng.shizuoka.ac.jp/etc/WB-ja.html>)

尾高訳 1936: 尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波書店

尾高訳 1980: 尾高邦雄訳『職業としての学問 (改訳)』岩波書店

折原浩 1981『デュルケームとウェーバー——社会科学の方法——』三一書房

木村毅 1964『早稲田外史』講談社

出口訳 1954: 出口勇蔵訳『職業としての学問』『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇 21 ウェーバー』
河出書房

出口訳 1982: 出口勇蔵訳『職業としての学問』『完訳・世界の大思想 1 ウェーバー 社会科学論集』河出書
房新社

寺崎昌男 2000『日本における大学自治制度の成立 (増補版)』評論社

中山訳: 中山元訳 2009『職業としての政治／職業としての学問』日経 BP 社

野崎敏郎 2011『大学人ヴェーバーの軌跡——闘う社会学者——』晃洋書房

野崎敏郎 2016『ヴェーバー『職業としての学問』の研究 (完全版)』晃洋書房

別府昭郎 2016『大学改革の系譜——近代大学から現代大学へ——』東信堂

三浦訳: 三浦展訳 2009『現代訳 職業としての学問』プレジデント社

三木訳: 三木正之訳 1992『訳稿ドイツ講演選』私家版

〔付記〕

本稿は、平成 27 ～ 29 年度科学研究費（基盤研究（C）, 課題番号 15K03825）による研究成果の一部である。

（のざき としろう 公共政策学科）

2018 年 5 月 1 日受理